フェアリー・チルド

鈴寝間着

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
フェアリー・チルド

【Ｎコード】
Ｎ００９１Ｚ

【作者名】
鈴寝間着

【あらすじ】
元人気映画の子役として出演していた俺、滝川　海斗は友達の少女を撮影中の事故で無くしてしまう。それを境に少年は『勇者君』と蔑まれ、苛められるようになってしまった。
そんな俺のいるクラスに転校生がやってきたんだ。
そいつの名前は『紺野　紫水（しすい）』、真っ白な髪を揺らしながら俺になんて言ったと思う？
「あなたのための世界があるの」
ふざけるなと思ったさ、だが彼女との出会いが俺を次第に変化させ

ていく。
すこし病んでファンタジーラブコメディー
どうぞよろしく

第1章　STEP　ON（前書き）

ふぅん、楽しんでいってくださいm（_　_）m
初心者ですのでお手柔らかに

第1章　STEP　ON

幼い時の事を覚えている人は少ないかもしれない。
例えそれが辛く、苦い思い出でも・・・また幸せな出来事でも年がたつにつれて人は次第に忘れてしまうものなのだろう。

でも僕は覚えている。

あの崖から突き落とされるような思い出を、たった1人で耐えた日々を・・・。
町を歩くだけで「あの子って・・・」と言われ、小学校では顔も知らない人に虐められさえした。
それでも耐えて見せた。鉄の仮面をかぶり、唯一の安全地であるはずの家でも自分を閉ざし続けた。

その苦しみの始まりは小学5年生の夏だった・・・。
僕は商店街を歩いていたんだ。もちろん一人じゃなかった。
隣にはもう名前も覚えていないけど女の子がいたはずだ・・。
人ごみにもまれ、なんとか端によって一息ついて僕は少女にこう話しかけたんだ。
「今日ってほんとについてないな。そこら中でセールをやってるから人が多いや」
しっかり握った手にギュッと力を込めると、少女に笑いかけた。
「うん、だね。夏場の暑さに加えてこれだけ人が集まると嫌になっちゃうね」
苦笑といった感じで少女も僕に微笑み返してくる。
人ごみのせいで熱くなった空気は渦巻き、僕たちの額からたらたらと汗が流れた。
「君たち・・・少しいいかな？」

髪を短く切りそろえたいかにも中年な男が突然僕たちに声をかけてきたんだ。
本当に見えているのかと思うほど細い目は僕たちに向けら、見られているこっち側とすれば少し気味が悪かった。
「ごめんね、怖がらせちゃったかな？おじさん怪しい人じゃないから」
明らかにその発言が怪しい・・・。
思わず一歩引く僕たちに困ったように頭を掻くと、スッと内ポケットに手を突っ込むと名刺らしきものを2枚取り出して僕たちに渡してきた。
「おじさんこうゆう者なんだけど、しらないかな」

○○映画スカウトスタッフ
前田　菱機（りょうき）

「おじさんね、映画のスカウトをやってるんだけど、君たち映画に出てみないかな？」
それはＣＭでも宣伝されているほど有名な映画で、突然役者の男の子と女の子、の役が二人死んでしまったので募集していると有名な映画だった。
ファンタジー物の映画で小学生～中学生まで今はやりにもなっているほどの超大作だった。
普通オーディションなどで選ばれるものらしいが監督の意見で一般人からもスカウトしてるみたいだ。
「おうちの人と相談して電話してね、名刺に電話番号書いてあるから」
糸目の男はさっさと人ごみに交じると数秒もしないうちに消えてしまった。
もちろん僕たちの親は映画に出ることを賛成してくれた。
理由の一つは親が映画好きだった事と、その時は知らなかったが子

供の将来を思うと役者でデビューしておけば未来は幾分か安全だそうだ。
二人笑いながら映画で演技する日々・・・それは酷でもあったし辛かったけど何より隣にあの子がいたことで、前の日々よりもいっそう楽しくなった、ただ砂が流れるように楽しい時間が過ぎていくのを見ていたんだ。
そのあとに何が来るのかも知らずに・・・。

第一章　Ｓｔｅｐ　ｏｎ

「起きろよ、勇者君よぉお！！」
横腹にいきなり激痛が走る。
「寝てねぇで、さっさとパンかってこいや！」
次は逆の横腹を殴られた。
あぁ・・・最悪だ。せっかく幸せな夢だったのにぶち壊しやがって。
「・・・・・」
今まで寝ていた机から顔をあげて立ち上がると左右に居る男子を見る。
そりこみを入れた坊主と髪を赤く染めたロン毛・・・またこいつ等か。
見られていることに気づいた赤パツは俺に蹴りを入れてくる。
「あぁあ！？何睨んでんだよ？俺の言うことが聞けねえのかよ、勇者君よぉ」
脛をけられてよろめく俺に手を伸ばして胸倉をつかむとグッと持ち上げる。
赤パツより少し背の低い俺は軽々と持ち上げられると何も言わずまた見つめ返す。
「金髪だからってなめてんじゃねぇよ！」
剃り込みがまた睨んでると思ったのか頬に一発貰う。
「はぁ・・・わかったよ。焼きそばパンだろ」

降ろせと胸倉をつかんでいる手を叩くと地に足をつけてゆがんだネクタイを直す。
そんな冷静な俺にイライラ来ていたのか、みぞうちに一発入れてドアの方に剃り込みを連れて出ていく。
「5分後に屋上で待ってるからな、遅れたら半殺しな」
「勇者ならこれぐら出来るよな」
息も絶え絶えに跪く俺の背中に声をかけて廊下を馬鹿笑いしながら遠ざかっていくのがわかる。
その声が完全に聞こえなくなると今まで嘘のように静まり返っていた教室がにぎやかなものへと変わっていく。
「大丈夫？」
「暴力振るう男子って最低だよね」
「代わりに買って持って来ようか？」
「ホントにムカつくよな・・・あいつ等」
跪く俺にクラスメイトが数人駆け寄ってきて声をかけてくる。
「あぁ、大丈夫だ。ありがとな自分で行くから大丈夫だって」
口の中で鉄の味が広がるのを無視して購買へと歩き出す。

高校生になっても引きずられる過去・・・俺のあだ名は『勇者君』。
あの映画に出て俺の人生は一変した。映画が続いている内はまだ良かったんだ。
クラスの女子や男子からチヤホヤされ町を歩いても良い噂ばかり聞こえてくる。
もちろん、そんな俺に嫉妬を焼く奴もいただろうがそんな奴は気にならないほど楽しかった。
だが俺たちが出ていた映画は一年後に終わりを告げたんだ。
俺の友達、いつも隣に居てくれた少女・・・その子が放送中の事故で無くなったんだ。
俺の手の中で・・・ただ支える事しかできなかった。
皮肉にも俺たちの出た映画はバットエンドだった・・・。

最後は悪役が勝ち、悪役の都合のいい一種の平和な世界になる、そんな物語だったんだ。
最後のシーンで少女の最後のシーンがあったんだ、本当にこの世を離れ行く彼女のシーンが・・・。
その日を境に俺は蔑まれ、憎まれ罵られるようになったんだ。
そうだろう？役立たずの勇者がヒロインの彼女も守り切れず、現実では彼女が本当に死んでいるんだ。
『お前が殺したんだろう？』
『なぜ助けなかった』
そう聞かれても、、分からない、知らないとしか答えようがなかった。
そして憎まれた末に俺についたあだ名が『人間の恥』だったんだ。
それが俺の悪夢の始まりだったんだ。

第1章　STEP　ON（後書き）

ちょっと投稿方法ｍｓしたかな＾＾；
まだ初心者なのであとがきなんて（いえいえ）
では次の更新まで（さようなら）

1の続きです（新）（前書き）

少し足しました；；
迷惑をおかけしてすいません。

1の続きです（新）

「・・・きて、・・・起きてよ。・・ねぇ起きてよ！お兄ちゃん」
隣から飛んできた声に驚いて目を覚ました。
「あぁ、優華（ゆうか）おはよう。今何時？」
昨日殴られた頬を撫でながらカーテンへと歩きながら問う。
「んとね、今6時半だね。朝ごはんと昼ごはんの準備できてるから急いで出たほうが良いんじゃないかな？遅刻しちゃうよ？」
「あぁ、わかった。そうだ、まだ陸妬（りくと）のやつ来てないのか？」
遅刻と言われたからと言ってそぐ訳でもなくゆっくりと用意を始める。
「今日もいつもどうり来てないよ。あと10分ほどしたら来るんじゃないかな」
「分かった、ありがとな。優華は送れないように先に行っとけよ」
綺麗に染まった金色の髪をすくように撫でてやると愛おしげに眼を細めて部屋を出て行った。
俺、滝川　海斗と妹の優華は幼い時に母親を亡くしているんだ。
映画に賛成してくれたのだって新しい母親だった。
そんなこんなのせいか当時幼かった優華はまだ大丈夫だったが、当時の物心がつきたての俺にとって心を閉ざすには十分すぎる出来事だったんだ。
当時の俺は心を閉ざす自分に戸惑い、急いで1つの仮面をかぶったんだ。
それが俺の初めて身に着けた仮面、薄くもろく素の自分と大差なかったかもしれない。
だが、そうすることで周りの人と普通に接していられる気さえしていた。
それがいけなかったんだ。仮面をかぶれば周りの人が何気なしによってくる。

そう思い出した俺はいくつもの仮面をかぶるようになっていたんだ。
それは今でも続いている、幼稚園から高校まで家でさえずっと一緒に居る妹にだって、全てを隠している。醜い自分を隠すかのごとく。だから優華は知らない、俺が昨日のようにパシリ、殴られ、苛められていることを。
おそらく「勇者君」というあだ名さえ知らないかもしれない。
1つ年下の妹にさえ全てを隠している自分が嫌いだった。
だから・・・俺は、
ピーンポーンゆっくりとならされたチャイムにふと顔を上げる。
「海斗ぉ！おきてっかぁ？早く行かないと遅刻するぞぉ」
やかましい限りの声が家じゅうに響き渡る。
はぁ、もう来たのか・・。
知らないうちに腰を下ろしていたベットから腰を上げてリビングへと足を速める。
「すまん、少し待ってくれ、陸妬」
お弁当を持って急いで玄関に置いてあるスクールバックに押し込む。
ただ俺にも少ないが心を許した人が居たんだった。
「おはよう、陸妬」
「おはよっす、海斗」
こいつみたいに。
こいつと過ごす時間は好きだったんだ。バカみたいなことをして馬鹿みたいに笑って友達ってこうゆう者なんだと改めて思わせてくれるような奴だったんだ。
「何見てんだよ、海斗。向こうに夏帆(なつほ)でもいたか？」
陸妬は俺がたっている反対側をきょろきょろと見渡すがそこには誰もいない。
知らない間にジッと顔を眺めていたらしい。
「いや、今日もお前はバカヅラだなって眺めてたんだよ」
笑いながらそう告げると、健康的に焼けた頬を引くつかせながらグッと首の後ろに腕を回してくる。

「今日もバカヅラで悪かったなぁ、え遅刻王の海斗くんよぉ」
首に回した腕をグッと引き寄せて頭を締め付けられる。
へ、ヘッドロック？！
「ちょ、いたいって！うおぉぉお」
必死に抜け出そうと頭を後ろに引く。自分でしていてなんだが周りから見たら馬鹿らしいことこの上ないと思う。
道のど真ん中でやる事では無いだろう。

「すいません、そこ空けてください」

ほら邪魔になった。
メガネをかけた優等生系の女子に声をかけられる。
登校路のど真ん中でこんな事をしていたら注意されるのは山だろう。
でもされる相手が不味かった。
冷徹と称されるほどルールに厳しく、成績も学校でトップを誇っている我らが生徒会長殿、鏡河　雪原。
生徒会長のくせして朝は弱くいつも遅刻寸前で入門してるそうな。
ただ目をつけられたが最後、ゆうに1時間は説教されることになってしまうのだ。
ここは一刻も早く謝らなければ。
「「すいませんでした！！」」
ん？今声がハモったな。
頭を下げた状態で陸妬の方を見るとこっちを見ながら同じく頭を下げて笑っていた。

＊＊

「はぁ・・・疲れたな」
「朝からあの鬼会長に目を付けられるなんて今日ついてないぜ」
遅刻ギリギリに入門した俺たちは下駄箱で雑談していた。

あの後、きっちり３０分も説教されていたことは思い出すだけでも頭がいたい。
あと３０秒遅かったら遅刻していたに違いない。
「ホント運がないよな」
靴箱を開けながら陸妬の方を見て苦笑する。
「ん？なんか入ってるぞ、海斗」
陸妬の手が靴箱に入れてあったものに触れる前に急いで奪い去ってポケットに突っ込む。
毎度のパターンで言うと赤髪と剃り込みの命令書に違いない。
一つ言うなれば陸妬は俺の苛めについて何も知らないのだ。
「も、もしかして・・・」
途端にアワアワし出す陸妬に、勘付かれたかと慌てるがすぐに落ち着く。
なぜならって？
「ラブレターか？！畜生お前にもついに春が来たか」
とんでもなく鈍感だから。
今時ラブレターなんて・・・しかもノートの切れ端をそう思う奴なんて鈍感以外の何物でもない。

1の続きです（新）（後書き）

ちょっとずつ更新します

1～第2章　僕たちの明日（前書き）

前回の続きハ更新してあります＾＾；
お手間をおかけしてすいませんｍ（　　）ｍ
どうぞ御ゆるりと（サッ）

1～第2章　僕たちの明日

廊下で陸妬と別れた俺は自分の教室のをドアをゆっくり開く。
何人かの目がこちらを向くが、すぐにまた別の人との会話へと顔を戻す。
「おはよう、滝川君」
「あぁ、おはよう」
俺の隣の席のメガネに声をかけられる。
いつもニコニコしていて、気持ち悪いほど頭が良い事を覚えている。
ゆっくりと自分の椅子を手前に引くと崩れ落ちるように腰を下ろす。
「はぁ・・・疲れたな」
ポケットを漁(あさ)ってノートの切れ端を取り出すと、ゆっくりと開く。
どうせ今日の昼ごはんのメニューが書かれてるんだろう。
一回ノートの切れ端を開いて、あれ？と目をしかめる。
いつもは2つ折りなのに今日は4つ折りだ・・・。
『勇者君へ』
明らかに書いたのが赤パツのグループではない事が一目でわかった。
何より、そこそこきれいに書かれた字から赤パツグループの者の手紙ではないだろう。
それに命令の紙にわざわざあだ名を書くなんてめんどくさい事はあいつ等はしないはずだ。
なら誰だ・・・。俺をあだ名で呼ぶ奴なんて基本的に不良と決まっている。
新しい不良からの物か・・・・。

思わずゴクリと生唾を飲んでしまう。覚悟を決めると慎重に紙を開いていく。
あと少し・・・震える指先を抑えて慎重にあけていく。

「はぁ～い出席取るぞ」
空気を読まず入ってきた担任が俺の最後の一声？を押しとどめさせる。
長い溜息を吐きだすと担任に目をやる。
「うん、全員いるな。よし今日は一つ良いイベントがあるぞ」
イベントって。思わず苦笑しながら次の言葉を待つ。
「な、なんと転校生がうちのクラスに来るのだ！」
ジャジャァーンとでも言いたげに両手を広げる、２５歳独身教師の胸が弾むのを横目で見ながら高すぎるテンションにあきれていると、ガラッと前のドアが開くのが聞こえた。
おぉ！！と感嘆の声が上がるのが聞こえるが俺にはそんな事は関係ない。
どうせ新しい人が来ても仲良くなど成れないのだから。
机の前で２つ折りで待機していたノートの切れ端をまたゆっくりと開き始める。
「じゃぁ、挨拶でもして貰おうかしら。じゃぁ宜しくね」
ノートの隅の方に小さい字で名前らしきものが書いてあるのが見えた。
えっと・・・紺野（こんの）　紫水（しすい）って読むのかこれは？
「私の名前は紺野（こんの）　紫水（しすい）です。クラスに滝川君という人が居ると聞いています」
おかしいな・・・この切れ端に書いてある名前と一緒の名前が聞こえてきた気がする。
それに俺の名前が呼ばれた気が・・・。
思い切って切れ端をめくり上げる。
そこに書いてあったのは、
目に立つ少女は、
『滝川君、勇者であるあなたのための世界があるの』
一言一句切れ端に書いてある文字と同じ言葉が前から聞こえた気がした。

第2章　僕たちの明日

バッと顔を上げた俺の顔にいくつもの視線が突き刺さった。
いつの間にか目の前に来ていた、転校生　紺野紫水。
銀色とでも言おうか・・・透き通るように白い髪は腰まで伸び、女子にしては少し背が高く顔は人形のように整っている。
思わず見とれてしまう俺に彼女はまたあの言葉をつぶやいた。
「あなたのための世界があるの滝川君」
「・・・へ？」
驚きからか声が余りでない。どうやらその状況に陥っているのは俺だけじゃないみたいだ。
口をパクパクしながらこっちを見ているクラスメイトが見て取れる。
「少し来て」
一言いうと俺の手を取って教室の端にあるドアへと引っ張っていく。
ガラッとドアを開けると、失礼しましたとでも言う様に一礼するとドアを閉めて完全に廊下に出てしまった。
「「「えぇえええ！？」」」
俺が言いたい気分だよ。心の中で突っ込みながらも前で手を引いて歩く少女の姿を見る。
「ちょ、え、えと何か用かな・・・」
「少しで良いから黙ってついて来て」
小さくて柔らかい手とか髪から漂ってくる異様にいい匂いとか、階段を上って左右にフリフリと揺れるスカートなどいろいろな誘惑から自我を守りながら、大人しく少女の後をついていく。
階段を2回分上がったところを見ると屋上か・・・。
そう思うと脂汗がダラダラと垂れる。基本的に屋上には常に不良が溜まっているのだ。
その下っ端？幹部と名乗っているが赤パツと剃り込みもいるのだ。
「な、なぁ屋上に行くなら止めといたほうが良いと思うんだが・・・

」
君みたいなかわいい子が行くと何をされるか・・・かと言って俺が守れるわけでもない。
逆にボコられるのがオチだ。
「良いの分かってるから」
何がわかってるのか気になる・・・後ろで脂汗をかいている俺の手をぎゅっと握ると屋上へ通じる最後の階段へ登り切った。

1～第2章　僕たちの明日（後書き）

また近いうちに更新します。

2の続き（その1）（前書き）

早くも更新です^^;
30人オバーのお客さんがいるとわ少し驚きです>ワ<
どんどん書いていくのでお願いします。
なんか急展開なきが・・・;;
すぐ更新するので再度来られた時は量が増えてると思います（眠いので寝させてもらいます）

2の続き（その1）

少女は、さび付いたドアをそっと開けた。
少しずつ開けられるドアから漏れる光は俺たちを真っ白に染め上げた。

「ようこそ、名もなき物語へ。勇者さん」

屋上だったはずのソコはすでに違う場所になっていた。
いやすっぽり消えているとでも言うべきか・・・そこには一面に空が広がっていた。
目の前を雲が横切り、心なしか空気が薄い気がする。
いや実際に薄いのだろう、思わず身を乗り出して下をのぞきこんだ俺はとっさにそう理解した。
屋上だった所は山さえ小さく見えるような場所と入れ替わっていた。
思わず戸惑い後ずさる俺の隣でいきなりにこやかな声が響く。
「私たちのための世界だよ。あなたを待ってる人が居る。だから私があなたを導くのっ」
転校生にいきなり連れてこられて、それでもって屋上が消えてて・・・。
また数歩後ずさる。余りの事に脳が否定に入る。
それを見た転校生こと紺野さんは
「何処からともなく生まれ、誰からともなく取り込まれた幻想の世界・・・孤独な人のための世界」

2の続き（その1）（後書き）

明日にでも更新します

遅くなりました（前書き）

非常に遅くなったんですが、感覚おいても書くのでよろしくお願いします。
それとあけましておめでとうございます。

遅くなりました

その彼女の言葉にまた数歩、俺は下がってしまう。
俺は一つ忘れていたことがあったんだ。

ここは踊り場・・・。
つまりその先には階段があるのだ。
それを見事に踏み外した俺は気が付くと見事に天井を見ながら階段をガクガクと滑り落ちていた。
「そしてお前はこの世界でのゆう？」
俺が階段をおちていることに気が付いていないのか、一人力説を続けている紺野はようやくこっちを見て目をキョトンとせる。
落ちるたびに「が」とか「あ」とか漏れる声を意識しながら俺はとりあえずにやりと笑う。

ガンッ！

そもそも我が校の階段はそこまで長くなかった・・・・。
踊り場まで滑り降りた俺は勢いで柔道の後転をしたのち勢い弱まらず思い切り壁に頭を打ち付けた。
ブラックアウトし始める視界に、
あぁ、もう死ぬんだな俺・・・。
とか呑気の思いながら、駆け寄ろうと必死で階段を降りてくる紺野を眺めていた。
いやぁ・・・どこをって俺も男の子ですから・・・ね？
揺れる（自重）とか見えそうなパ（自重）とか見たいですもん。
いや、こいつ小っちゃいし揺れる物がなかったな。
そんなバカみたいな考えは長くはもたなかった・・・。
なんでかって？

最後の数段で見事に踏み外すと前のめりに俺の方にこけて来たのだ。
ガツッという鈍い音と共に俺の意識は刈り取られ完全に落とされたのだった。

＊＊

気が付くと俺は真っ白な天井を見上げていた。
「っ！」
ここがどこか確かめようと体を起こすとおでこの辺りを鈍痛が襲う。
恐る恐る触ってみるとそこにはたんこぶが出来ているようだった。
はぁ、吐息を吐いてからあたりを見回すと
薬品の匂い、綺麗に整頓された薬棚、白衣を着てメガネを掛けた紺野。
あぁ保健室か・・・はぁ！？
「こん、いッ！紺野何してるんだお前」
もしかして此奴（こいつ）コスプレの趣味でもあるんじゃないだろうか？
再度襲いかかってきた鈍痛に顔をしかめながらも問う。
「寒いから先生に上着貸してもらちゃった」
と同じくおでこを抑えながら言う紺野に俺は初めてそこで気が付いた。
「その・・・あれだ。すまなかった」
とりあえず目を逸らしながらも謝っておく。
「何がかな？」
寝てないさいとでも言うかのように上半身も寝かせるとベットの横に腰を下ろした。
「いや、紺野のデコにタンコブ出来てるのってさ・・・その、俺のせいだろ？」
顔を逸らしつつほっぺを掻きながらそこ端となく訊いてみる。
正直な話、本当に俺のせいかわからないのだ。

「うーうん。滝川君のせいじゃないよ。だって私がこけたのが悪いんだもん」
「いやさ、そもそも俺が落ちなければ、さ」
無かっただろ？と言おうとするが妙に意識が重い。
「滝川君は優しいね・・・」
ブラックアウトし始めた視界の中。
俺は彼女の涙を見た気がした。

＊＊

遅くなりました（後書き）

すいません取りあえず此処までｍ（＿＿）ｍ
みなさん、今年一年良いお年をお過ごしください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0091z/

フェアリー・チルド

2012年1月2日06時45分発行